

伊是名・伊平屋所在の三線について

園 原 謙

Regards to the Sanshin in Izena and Iheya islands

Ken Sonohara

伊是名島・伊平屋島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2019年3月15日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Izenajima and Iheyajima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2019

伊是名・伊平屋所在の三線について

園 原 謙*

Regards to the Sanshin in Izena and Iheya islands

Ken Sonohara

はじめに

筆者は、平成29年(2017)3月27日(月)、28日(火)の2日間の伊平屋島と平成30年(2018)6月26日(火)、27日(水)の2日間の伊是名島と、延べ4日間、伊平屋・伊是名両島に所在する三線調査を行った。

伊平屋島の場合は、所有者宅をまわりながら合計7挺の三線を調査した。また、伊是名では、同村産業支援センターの研修室を会場に、所有者に持参いただき、三線を調査することができ、合計16挺の調査を行うことができた。後者の場合は、村広報誌や防災無線による事前告知が周知されたおかげであった。前者は、各家において簡易な撮影セットを準備する必要が生じるため作業効率が悪く、多くの数量を行うことができなかった。一方後者は、調査場所の産業支援センターの和室の一室に撮影セットを準備した後は、調査のみに集中することができたので、調査の作業効率を高めることができた。

調査内容は、調査表に基づき、天、野、心の長さを測定し、棹や胴の銘文の確認、型名を確認した後で、由緒伝来等をヒアリングして、三線の撮影(胴付き正面、斜め45度、胴なし側面、天部分、爪裏部分、心部分の6カット)を行った。1挺あたりの調査時間は撮影込みで30分程度を要するが、撮影セットを組み立てる場合は、約1時間程度を要する。この調査では結局、両島で23挺の三線を調査すること

ができた(付録の調査三線一覧表と図版参照)。

本稿では、現代沖縄、とりわけ、島社会の中での三線に関する文化について考えてみたい。とくに、人々がどのようにして三線を入手し、「家宝」的存在として位置づけたかを考えるために、所有者自身が所有する三線の由緒・来歴についてどのように把握しているかについて、現状をヒアリングし保持の形態を分類し、三線の現状を撮影した。この時代に所在した三線の戸籍簿になるので、付録で図版として紹介することにした。また、王国末期の伊平屋島の古文書に、三線絃の入手の記載があることから、離島における三線の消耗品の入手方法を知る上で興味深い事例として紹介する。さらに、伊是名の旧家に伝来する古い三線で、心部分の接ぎがとれてしまい、修理されることなく放置された状態のものがあつた。壊れた状態でしか見るできない、三線の接ぎの仕組みがわかる資料である。筆者は、王国時代から継承されてきた三線製作技術において棹の接ぎ方は、現在はすでに廃れてしまった重要な製作技術のひとつだと考えているので、その意味で貴重な資料に巡り会えたので紹介したい。

また、筆者も関わった平成元年から4年の文化庁補助事業「県内所在琉球三味線調査」で、伊是名・伊平屋所在の三線調査を実施している。その際、伊平屋6挺、伊是名12挺合計18挺の調査を実施している。その中には、もともと島にあったものが、所有者の移動により本島に移動したものも含まれてい

*〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006, Japan

る。今回調査においては以前の三線調査と重複した三線が3点確認できたので、より高い精度で撮影を行うため再調査を行うことにした。

1 調査概要

① 伊平屋調査

伊平屋調査は、3月27日は事前調査を行い、28日に各所有者の家を2軒回って、所有する三線の調査を行った。十分に広報が周知されてなかったこともあり、悉皆的調査には十分でない件数であった。また、調査させてもらった三線は殆どが戦前のものが主であったが、現代において三線を人々がどのように入手したかについてや、製作の経緯や活用についてヒアリングすることができた。7挺の三線のうちの型別は、真壁型が4挺、与那城型3挺(図版NO.1～No.7参照)であった。

また、25年前に行った三線調査においては、6挺の三線が調査されているが、型ごとの内訳では、知念大工型1挺、真壁型2挺、与那城型3挺であった。

② 伊是名調査

伊是名調査では、6月26日午後から11挺、27日午前中に5挺の合計16挺の三線を調査することができた。沖縄の三線には大きく7つの型があるが、型ごとの分類ではここでは4つの型が確認できた。具体的には、真壁型10挺、与那城型4挺、久葉の骨型1挺、平仲知念型1挺であった。また、製作年では、戦前10挺、戦後6挺であった(図版NO.8～No.23参照)。

また、以前に行った三線調査においては、12挺の三線が調査されている。型ごとの内訳では、真壁型8挺、与那城型4挺であった。No.14、No.16、No.17の3挺は、所有者の代替わりが親から子への継承されていることが確認された。

なお、伊是名村で格式の高い家が島の南西側にある集落・字伊是名にある。伊平屋の阿母加那志を継承する屋号「ウドゥン」とよばれる名嘉家がある。現在の当主の名嘉永和(87歳)は19代目だが、戦前には、大きな茅葺屋で、沖縄戦の戦時中は屋敷内の避難壕に家宝の品々を隠していたという。

同家には貴重な夫婦三線があったと永和さんという。同三線棹の心には、朱書きの銘書きあったというが、何が記されていたかの記憶は不明である。本人によって昭和40年代まで存在の確認ができたという。三線を収納する三線箱も家紋に加え、松などの絵が描かれていたという。

当時、三線を持っている家は殆どなかったというが、村の豊年祭等で、三線の貸し借りをを行っている中で、いつのまにか所在が不明になったという。もしあったなら、拝領三線と思われる貴重なものであったことが推察されるが、伊是名でもっとも由緒のある家宝三線ウドゥン三線の行方が不明であることは、大きな損失である。

③ 伊是名・伊平屋所在三線所持の形態について (ヒアリングより)

今回、調査を行った三線については、付録として「調査三線一覧表と図版」にまとめてみた。調査では、島の人々が三線をどのように入手し、現在所持しているのかについて聞き取りを行い、おおよその製作年の参考にしている。そこで、これら三線の保持形態を3パターン(「継承」、「記念」、「その他」)に分類してみることにした(図1)。

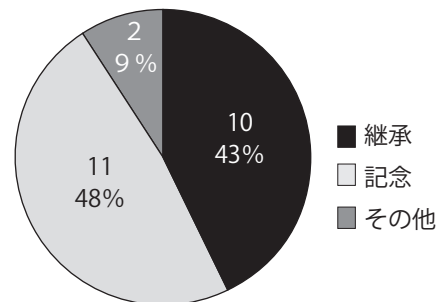


図1 三線保持の形態

「継承」は、自身の以前の所有者、例えば、父や母、祖父母の代から伝わったものとした。「記念」は、なんらかのメモリアルを記念して、三線を新たに製作し、継承の対象物としたものである。ここでの事例では家の改築等で、三線材として適当な材が多くでたため、まとめて製作したものが含まれる。その他は、その2例に該当しないものとした。

伊平屋、伊是名島の事例では、「継承」される三線が10挺で43%を占め、なんらかの「記念」を目

的に新規に製作した三線が11挺で、48%、その他が2挺で9%を占めている。

興味深いのは、新たな三線が次々に作られ、継承の対象物になっていることである。それらは、単に所有者の嗜好や思いつきによるものかもしれないが、三線材として適当な材が身近に存在することが前提の場合が多く、その材の利活用として三線が製作されることがある。このように考えることがきわめて沖縄的といえるかもしれない。

No.1の三線は、沖縄の人々の行動原理を考える上で興味深い事例と考えることができるので紹介する。

（この三線は、）20年前に製作したもの。戦後1950年代に造った家の柱はユシギ材（イスノキ）で、当時ヤンバル（沖縄島北部）の安波、安田からサバニ2隻で運搬。柱材から19挺の三線を製作してもらった、というものだ。

沖縄の伝統的な平屋家屋の柱材や床柱材には、良質な材が使用される場合が多い。その材として重用されるのがリュウキュウコクタン（クルチ／黒檀）やイヌマキ、イスノキ（ユシギ）である。とくに、黒檀やイスノキは、堅木であることから三線材として重宝されてきた。戦後の沖縄の家屋づくりは、木造平屋が主流であったが、復帰前後から台風被害に耐えることができる堅牢度が高い鉄筋コンクリート造りの家屋が主流となっていく。その結果、木の利用は主要な構造材の利用から、内装材や装飾材へと激減してしまったのである。家の形態の変化が、廃材の適正利用としての三線に製作を促す契機になったことを示す一例である。家屋材は、伐採から数十年以上経ているので、十分な枯らし期間を経ており、三線製作を行う上でもねじれや狂いが生じる恐れがないため、三線製作者にとっては、垂涎的の良材である。また別の例では、親戚の85歳の生年祝いを記念していただく事例も興味深い。戦後、琉球古典音楽の業界（保存組織）では、沖縄県内の二紙（琉球新報社と沖縄タイムス社）と組んで新聞社主催の三線演奏家や舞踊家のランクづけを行うコンクール事業を行うようになった。新人賞からはじまり、優秀賞、最優秀賞、グランプリとより難度が高くなっていく。趣味として、または教授業として競って学ぶ人が多くなった。生年祝いの記念として三線を贈

呈することも、芸能を愛する県民性に依存している。

継承の例では、父や祖父から、母や息子からプレゼントされる事例が多い。

その他の事例では、骨董屋で入手した事例や古典音楽の師匠から譲渡された事例が確認できる。

ヒアリングの中で、伊是名在中の三線製作者の名前がでてきた。那覇で三線製作の技術を学んできた三線製作者（山川光成さん）がいたという。山川さん製作の三線がNo.12のウシヤーの真壁型三線である。一例しか確認できないが、島に三線製作者がいることは、三線を演奏する人々にとっては、大変貴重な存在である。製作者にとっては、島内でメンテナンスを行うことは一定の顧客を得ることになるがそれだけで生計をたてることは厳しい。島民にとっては、本島に出かけずに島内で首尾良く完結することはありがたいことである。三線製作者にとって、離島で、原材料材を確保することは大変である。No.15の事例は、三線製作者から良質の三線材を譲渡された話がある。製作者の廃業に伴って、三線材が流出する事例として興味深い。

④ 25年前の三線調査－「県内琉球三味線調査」

平成元年から平成4年まで、沖縄県（元教育庁文化課）は戦後生き残った県内所在の古三線の悉皆的な調査を実施した。三線の実演家を中心に三線のモノの鑑定に精通した方々を中心に調査員に委嘱した。主任調査員を当時琉球大学教授の池宮正治先生が務め、三線の鑑定については、人間国宝の島袋正雄先生をはじめ岸本吉雄先生、玉栄昌春先生、比嘉常俊先生、新垣正次郎先生ら琉球古典音楽の実演家の先生方があたった。さらに沖縄本島、宮古、八重山の博物館学芸員も含めて調査員を構成した。4年間で委嘱した調査員の延べ数は16人を数えた。

平成3年と4年は、筆者が調査事務を行ったが、平成元年と2年は前任者（大城将保氏）で、伊是名と伊平屋は、前任者が行っていた。

その報告書には、伊平屋並びに伊是名所在またはゆかりのある三線が18挺掲載されている。そのうち伊平屋が6挺、伊是名が12挺ある。型別にみると、10挺が真壁型で、与那城型が8挺、知念大工型が1挺であった（表2『『沖縄の三線』掲載の伊平屋・伊是名所在またはゆかりの三線一覧』参照）。今回

る。

一蛇皮張（手間賃四十錢）、一上等ツーガ（チーガ）製造（全七十錢）、一中等全（全五十錢）、一
等全三十錢）、一カラクヒ（イ）上等（四十錢）、一
全中（三十錢）、一全下（十六錢）、0一ブーアテー
度に付（全十錢）、一トーイ修繕（全二十錢）、一歌
口製造賃（全五錢）、一上等馬（全二錢）、一上等シ
ブ張（全二十錢）、一全中（全十八錢）、一全下（全
十六錢）、一糸掛上（全八錢）、一全中（全六錢）、
一全下（全四錢）。

この告知には、最も重要視される棹の製造をはじめ蛇皮や絃の代金の揭示はされていない。その理由としては、棹についてはクルチ、ユシギなど材質によって値段が異なるので、表示するのが困難だと考えることができる。また、蛇皮そのものもなんらかの理由で統一価格が設定しづらかったのではないかと思える。ただ、絃については統一的な価格を設定することは可能だと思える。糸掛とは、3つの絃を結びつける組み紐で、猿尾にひっかけるものである。その糸掛に絃が含まれているのであれば合点できる。いずれにしても、絃は基本的には三線店で調達が可能だと考えた方が自然である。

3 三線の製作技術—とくに接ぎ棹の製作技術

今日の三線製作者は、三線の棹を接がないことを常識としている。この考え方は、戦後、いちちやく三線調査の先駆者となった池宮喜輝（野村流琉球音楽協会顧問師範）の場合も含めて、当時の実演家の場合にもあったと推察される。池宮は約9400挺の

今般三味線大工中契約を締結し左の通り賃金相定め附 し候若し違約のものは五圓以上二十四圓以下の違約金を 徴収致し候也	手聞賃四十銭
一三味線蛇皮張	全七十銭
一上等アゲ製造	全五十銭
一中等全	全三十銭
一下等全	全四十銭
一カラキヒ上等	全三十銭
一全中	全三十六銭
一全下	全十銭
一ブーアチ一度に付	全二十銭
二トリー枝粉	全五銭
一嵌口製造賃	全二銭
一上等馬	全二十銭
一上等シブ張	全十八銭
一全中	全十六銭
一全下	全八銭
一桑掛上	全六銭
一全中	全四銭
一全下	全四銭
十月廿五日	組合人中

図3 源河ウェーキ三線の天と野の下部（心部分の接ぎか）

三線から約4%に相当する363挺三線を合格三線として位置づけた。その審査基準の中のひとつに「棹に接ぎがないこと」が含まれる。

しかし、このような三線の考え方は、歴史の中の工芸品資料を正しく反映しているとは思えない。筆者はハワイ調査においても銘書き三線で心に接ぎある三線を調査したことがある。貴重な三線材であるリュウキュウコクタンの効率的な活用を考えると、端材といえども無駄にできないのではないと考える。池宮には、棹に接ぎがある三線の「接ぐ」製作技術を是非、記録保存してほしかったと思う。

① 棹接ぎ技術の例示

筆者はこれまで接ぎのある三線をいくつか確認したことがある。ハワイのヒロで調査をした際に銘書き三線に出会ったが、その三線も接がれていたので、これまでの事例を数例紹介しながら、接ぎ方のバリエーションのいくつかの事例を紹介して、今回の伊是名調査で確認できた心部分の接ぎ方を紹介する。

ア) 源河ウェーキ三線の棹接ぎ

王国末期の「咸豊三年(1853)」の銅銘書きのある源河ウェーキ三線の棹は、天の曲りの部分と鳩胸の出っ張りの部分が接がれている。接ぎがされる箇所は、視認できる範囲では、少なくとも2箇所ある。漆塗りの上から経年による材収縮等により目視できるほどである。天の上部が木釘と思われる直径7mmの丸い形が確認できる。もう1箇所は、野の下部に、同様な釘痕を確認することができる。

イ) 東博所蔵「蛇皮線」の棹接ぎ

東博こと東京国立博物館が所蔵する蛇皮線(三線)がある。明治17年(1884)に入手されたものである。当時、民族学研究が盛んであったプロシア政府(現在のドイツ)からの要望で、東アジアの一国であった琉球王国の崩壊にあたり、民族学的な資料の収集の一環として日本政府(内務省)を通して収集に努めた。現在これら資料は、ドイツ・ダーレムの国立民族学博物館に所蔵されている。日本政府もドイツを模して、ドイツ要望の資料を2セット収集し、そのうちの1セットが、現在東博所蔵の琉球関係資料を構成している。その中に、「蛇皮線」こと三線が



図4 蛇皮線(東博所蔵)の4箇所(左上下2点)の接ぎ箇所と野の接ぎの原理

含まれる。置県から5年後に収集されたので、王国時代から活躍した三線製作者による三線だと考えており、王国末期の下限設定ができる基準作のひとつと、筆者は考えている。この三線棹は4箇所(図4右下の○で囲っている箇所)で接がれていることが最新の研究(C T撮影)でわかった(図4)。戦後、接ぎのある三線は、将来に木地が痩せて音に狂いが生じる恐れがあるとの考え方があった。三線研究の先駆的な役割を果たした池宮喜輝は、そのため接がれた三線は、由緒伝来が古くても、調査研究の対象から除外しているぐらいである。実演家であった池宮は、楽器としての機能を重く捉えた。

この三線は、既述の源河ウェーキ三線同様に、天上部で接がれている。さらに、まさに音に影響を及ぼす恐れがある野の真ん中でも接いでいる。そして、心部分でも接がれている。

肉眼では、野の接ぎ方は精巧で、視認することが難しい。かっちり接いだ上に、漆で固めている。製作年の下限は1884年なので、135年前の三線であるが、高度な木組みの製作技術と漆の堅牢度の高さから、現段階では顕著な劣化や木地痩せによる漆面

の亀裂は確認できない。王国時代の三線製作技術の精巧さを知る上で大変貴重な三線である。

ウ) 伊是名の旧家に伝来する三線の棹接ぎ(心部分)

琉球王国の第二尚氏王朝の開祖は伊是名島出の金丸こと尚円王とされる。同王の治世において、姉真世仁金は伊平屋の阿母加那志職を、叔母真世仁金は二カヤ田の阿母職を務めた。国王の叔母の旧家・二カヤ田に伝わったとされるのがこの三線で、現在は伊是名村教育委員会が管理を行っている(No.19参照)。この三線は拝領品として伊是名に渡ってきたものと思われるので、その製作は王国時代に遡ることができるものではないかと考える。

通常は、接がれた三線の棹の心部分がはずれたら、三線としての機能を果たすことができない。同家では壊れた三線でも由緒ある大切なものとして扱われてきたので、家宝三線として廃棄されずに残ったと思われる。

この三線の存在は、三線の製作技術、とりわけ棹を接ぐ高度な技術を示す貴重なモノ資料になる。そして、接ぎ棹を否定する傾向の戦後の三線観を大きく変換する例示である。限られた貴重な黒檀材を効率的に使用するのであれば、木地を接ぐ技術が必要になる。

三線製作者が「三線打」の職名で貝摺奉行所の一員であったことは、精巧に接いだ木地づくりとその

上から黒漆で塗り固めることは漆芸品を製作する上では一連の作業である。漆芸品として三線を考えるのであれば、螺鈿や沈金、堆錦などの加飾がないことや、木地を強化するために布着せを行わないことだけで、それ以外は同様な製作工程を経る。三線打と一般的な漆芸品製作職人の木地づくりにおける決定的な技量の違いは、比較的ねじれや暴れの少ない材質をもった堅木である黒檀やイスノキの整形技術にあるといっても過言ではない。

本作は、鳩胸の中央部分で、棹の本体と心部分が接がれる。接合部分は上下に2箇所、竹釘で行われた。接合部分には本体を凹状に、心部分を凸状にして接合される。下部の接合は、内側ではめ殺しの手法で竹釘を用いており、固定を強固するために釘で接着される穴には紙が詰め込まれているのが確認される。また接合の形状を「ハ」の字状加工にすることで、接着部分の結合力を高める工夫がされている。また、上部の接合部分は、鳩胸の上部外側から竹釘打ち込んで固定する。凹凸両面には、接着材として膠などが用いられた可能性がある。

接着面や材質の二酸化炭素の放射線同位体測定などの科学分析を行うと、材料の黒檀材がいつ頃に伐採されたかなどの詳細な科学的知見が得られる可能性がある。爪裏の内側のノミ型は、角ノミ総取りにすることで、接着面をカムフラージュすることができる。壊れた資料も、このように製作技術を考える上で貴重な情報を提供することができる好例である。

4 まとめにかえて

本稿では、いくつかの新しい知見を紹介することができた。三線所有者から三線を所持した経緯等について話を伺った。そのヒアリングから3つの三線保持の形態があることを確認することができた。すなわち、「継承」、「記念」、「その他」である。この保持形態は広く適用が可能だと考える。また、王国末の離島の生活状況を知るための古文書の中に、三線絃の注文が含まれていたことから、少なくとも王国末には、製品としての三線絃が流通していることが判明した。さらに、接ぎ棹三線の今後の評価について一石投じる三線の発見があったことは、大きな成果のひとつといえる。戦後の三線の実演家や三線



図5 二カヤ田伝来の心が接がれる三線

職人においては、接ぎ棹三線の存在について否定的な見解を持つ人が多くいる。しかしながら、現存するいくつかの古い三線に接ぎ棹の事例があることがわかっている。そして今回の三線の発見は、旧家で大切にされてきたが、残念ながら接ぎがはずれた状態になった、いわば壊れた三線である。壊れたことが幸いにして、棹接ぎの具体的な仕方がわかった興味深い資料である。三線製作者にとって、良材の無駄のない効率的な使用実例として木地の接ぎ技術は不可欠であったのではなかろうか。第二尚氏王朝ゆかりに所在する1挺の三線の存在から、とりわけ戦後の三線観（接ぎ棹を否定する考え）が転換される可能性がある。

引用・参考文献

- 高良倉吉『琉球王国史の基礎的研究』（1992 九州大学学位論文）
- 園原 謙「琉球・沖縄における三線受容の文化史」『三線のチカラー形の美と音の妙一』（2014 当館）
- 小野まさ子・漢那敬子・早瀬千明「〈史料紹介〉伊平屋新垣家文書―解題および翻刻―」『沖縄史料編集所紀要第40号』（2017 沖縄県教育委員会）

謝辞

伊平屋村教育委員会、伊是名村教育委員会、九州国立博物館、東京国立博物館、沖縄県三線製作事業協同組合、與那嶺一子氏、伊是名・伊平屋両村の調査に協力いただいた方々に感謝申し上げます。

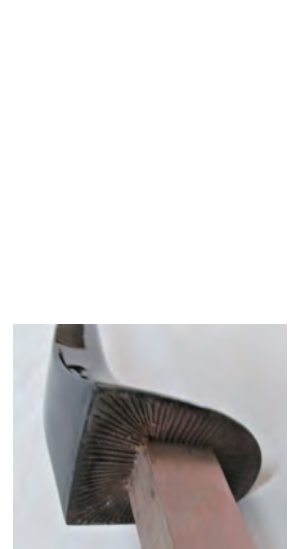
5 付録（調査三線一覧表と図版） ※網掛けは、25 年前の三線調査で行った三線

NO.	名 称	型名	棹の法量等				制作年	所在地
			全長	野の長さ	心の長さ	爪裏ノミ取り		
1	西江の江戸与那型	与那城型	79.8	48.9	19.8	平取り	戦後	伊平屋村前泊
2	西江の真壁型	真壁型	78.2	47.7	21.3	角ノミ総取り	戦後	伊平屋村前泊
3	西江の小真壁型	真壁型	77.0	47.8	21.2	平取り	戦前	伊平屋村前泊
4	西江の真壁型	真壁型	77.8	47.8	21.3	角ノミ総取り	戦後	伊平屋村前泊
5	三吉ヤーの真壁型	真壁型	79.0	47.8	21.5	丸ノミ総取り	戦後	伊平屋村田名
6	三吉ヤーの与那城型	与那城型	78.8	47.8	21.4	平取り	戦後	伊平屋村田名
7	三吉ヤーの与那城型	与那城型	81.6	47.8	21.4	平取り	戦後	伊平屋村田名
8	南風の二かや田阿母の江戸与那型	与那城型	84.0	48.0	21.5	平取り	戦前	伊是名村教育委員会管理
9	ウシヤーの久葉の骨型	久葉の骨型	78.8	48.2	21.8		戦前	伊是名村伊是 3358 番地
10	ウシヤーの真壁型	真壁型	78.7	48.0	21.6	角ノミ総取り	戦前	伊是名村伊是名
11	ウシヤーの江戸与那型	与那城型	80.8	48.2	21.6		戦後	伊是名村伊是名
12	ウシヤーの真壁型	真壁型	77.8	48.2	21.6	丸ノミ総取り	戦後	伊是名村伊是名
13	比嘉の真壁型	真壁型	78.8	47.8	21.8	平取り	戦後	伊是名村諸見
14	北の伊禮親雲上の真壁型	真壁型	78.2	47.8	21.3	平取り	戦前	伊是名村仲田
15	北の伊禮親雲上の平仲知念型	平仲知念型	80.3	48.6	21.5	平取り	戦後	伊是名村仲田
16	ウッチガミヤーの小真壁型	真壁型	77.6	47.4	20.6	角ノミ総取り	戦前	伊是名村仲田
17	ウッチガミヤーのタマイ真壁型	真壁型	77.6	48.2	20.7	角ノミ総取り	戦前	伊是名村仲田
18	銘苅親雲上の小真壁型	真壁型	76.5	48.2	20.4	丸ノミ	戦前	伊是名村伊是名
19	南風の二かや田真壁型	真壁型	76.8	48.4	21.3	角ノミ総取り	戦前	伊是名村教育委員会管理
20	南風の二かや田真壁型	真壁型	78.0	48.5	21.0	角ノミ角取り	戦前	伊是名村教育委員会管理
21	ヤマヤーの与那城型	与那城型	80.0	48.3	22.5	平取り	戦後	伊是名村伊是名
22	重信ヤーの与那城型	与那城型	79.4	48.2	27.5	平取り	戦後	伊是名村仲田
23	儀間の真壁型	真壁型	78.7	48.5	21.6	角ノミ角取り	戦前	伊是名村勢理客

NO.	備考（由緒・伝来等）	伝来のパターン			調査日
		継承	記念	その他	
1	20 年前に製作したもの。戦後 1950 年代に作った家の柱はユシギで、当時、ヤンバルの安波、安田からサバニ 2 隻で運搬。柱材から 19 挺の三線を製作してもらった。東風平の三線響に製作してもらった。胴は縦に丸ノミで彫られたもの（志多伯型）を使用。		●		2018 年 3 月 28 日
2	20 年前に製作したもの。沖縄市の比嘉さんに 10 挺まとめて製作したもの。		●		2018 年 3 月 28 日
3	入手経路は不明だが、戦前のもと思われる。胴の裏皮はなしで、マイクを装着して弾いている。天の漆がすり減る。		●		2018 年 3 月 28 日
4	西江家は 150 年前に前島（伊是名）か後島に移住した。喜進さんは、伊平屋に来て 4 代目。東風平の三線響の上原さんに製作してもらった。		●		2018 年 3 月 28 日
5	大正生まれの父親から譲渡された三線。父親は名が三吉で、45 年間、田名の豊年祭の地方であった。戦後買い求めたものだという。	●			2018 年 3 月 28 日
6	母の妹のご主人の 85 歳の御祝いでもらった。その父親は船頭をしており、木をもってきて作った。鳩胸が平仲知念型の特徴を持つ。		●		2018 年 3 月 28 日
7	10 年ほど前に人を介して入手した。銘苅春政作		●		2018 年 3 月 28 日
8	心の正面に「名嘉正明」、裏に「銘苅作」の銘彫りあり。銘苅春政の制作と思われる。糸蔵が長い。		●		2018 年 6 月 26 日
9	戦後、伊是名村長をした銘苅朝英から入手。材はコクタン		●		2018 年 6 月 26 日
10	糸蔵部分から天が折れたため、自身で竹釘を入れて接合したという。この三線は父親から譲ってもらったもの。補修部分に黒ペンキを塗る。材はコクタン。遊び三線として活用している。	●			2018 年 6 月 26 日
11	東恩納清二（伊平屋出身で野村流の師範）から譲渡してもらった。チーガの蛇皮の張り替えは、本部町渡具地の上原三線店で行った。上原三線店は、先代から息子の代になっている。			●	2018 年 6 月 26 日
12	伊是名島の三線製作者であった山川光成（那覇で三線製作を修行したという。平成 25 年頃に死去。）が 30 年前に制作したもの。材はコクタン。		●		2018 年 6 月 26 日
13	西表出身の母から贈られたもの。鳩胸は平仲知念型。天は真壁型。	●			2018 年 6 月 26 日
14	母方の祖父（81 歳）が伊江島の知人から譲渡してもらったもの。戦前からの三線とされる。コクタン。棹が細い。	●			2018 年 6 月 26 日
15	伊是名島の三線製作者であった山川光成（那覇で三線製作を修行したという。）からヤエヤマコクタンを譲ってもらった。平成 27 年に親泊（宗康か）さんに制作してもらったという。ウズラミーの材を活用し、塗りをスンチ塗りにした。		●		2018 年 6 月 26 日
16	『沖縄の三線』108p に掲載。NO.9 と夫婦三線。材はユシギ。昭和初め。祖父の代に入手された。NO.10 と夫婦三線。祖父は伊豆味姓であったが、1957 年に「我喜屋」姓に改姓。	●			2018 年 6 月 26 日
17	『沖縄の三線』108p に掲載。NO.9 と夫婦三線。材はユシギ。昭和初め。祖父の代に入手された。猿尾に牛骨 14cm が挿入。	●			2018 年 6 月 26 日
18	制作年代は戦前。材はユシギか。軽い。	●			2018 年 6 月 26 日
19	鳩胸の凸部分が継ぎ足し。本体と接ぎ材の両方に竹釘を刺す。固定するために穴に紙を入れて固定力を高める工夫が確認できる。材はコクタン。	●			2018 年 6 月 27 日
20	19 と夫婦三線だと思われる。	●			2018 年 6 月 27 日
21	息子から 4 年前に譲渡。材はユシギで心材は、黒色が塗られる。	●			2018 年 6 月 27 日
22	照屋勝武作。2015 年に購入。コクタン材。糸蔵が長い。	●			2018 年 6 月 27 日
23	2013 年頃、浦添の骨董屋で求める。漆はがれていたので、上原三線屋に塗直しをしてもらった。心の正面に「照琉」、左側に「名器屋良部崎」と朱書きされる。三線鑑定会の「NO.2200」とシール有。			●	2018 年 6 月 27 日



No.1 西江の江戸与那型



No.2 西江の真壁型



No.3 西江の真壁型



No.4 西江の真壁型



No.5 三吉ヤーの真壁型



No.6 三吉ヤーの与那城型



No.7 三吉ヤーの与那城型



No.8 南風の二かや田阿母の江戸与那型



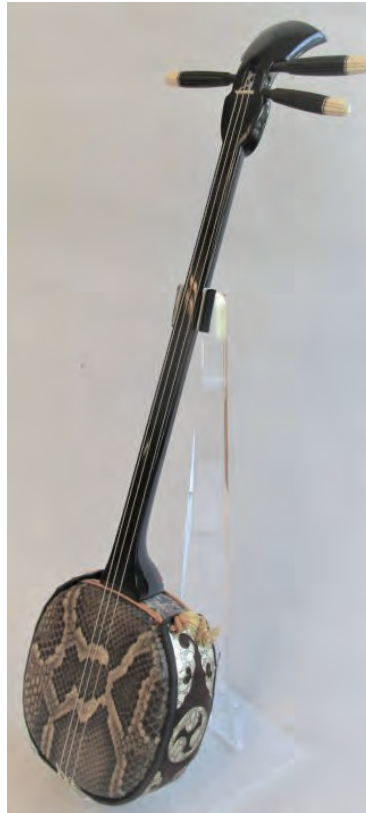
No.9 ウシヤーの久葉の骨型



No.10 ウシヤーの真壁型



No.11 ウシヤーの江戸与那型



No.12 ウシヤーの真壁型



No.13 比嘉の真壁型



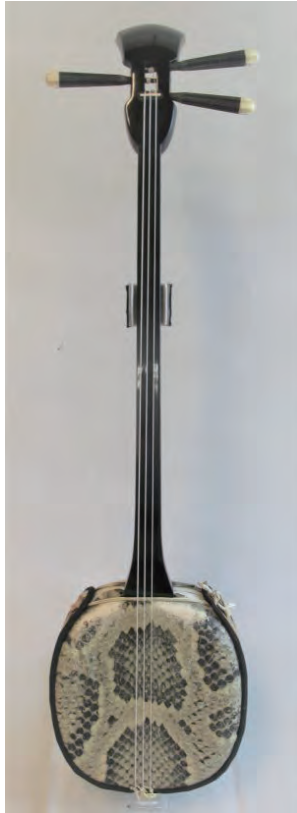
No.14 北の伊禮親雲上の真壁型



No.15 北の伊禮親雲上の平仲知念型



No.16 ウッチガミヤーの小真壁型



No.17 ウッチガミヤーのタマイ真壁型



No.18 銘苅親雲上の小真壁型



No.19 南風の二かや田真壁型



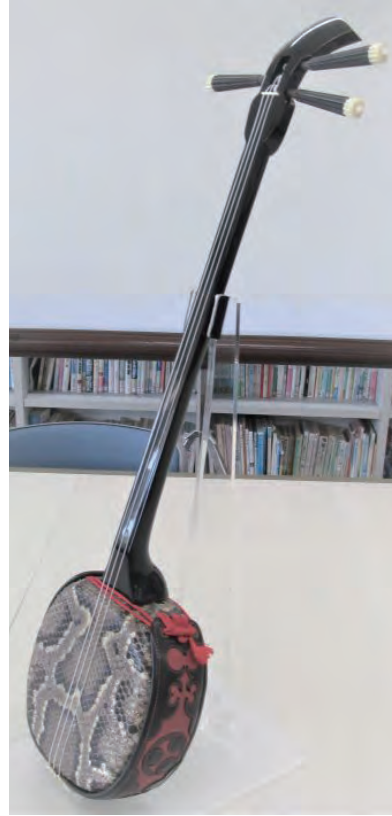
No.20 南風の二かや田真壁型



No.21 ヤマヤーの与那城型



No.22 重信ヤーの与那城型



No.23 儀間の真壁型

